

横浜ナザレン教会・2020年聖霊降臨節第四主日礼拝
「主の弟子への招き」ルカ福音書14:25～35

ルカ福音書 14:25 大勢の群衆と一緒に来たが、イエスは振り向いて言われた。²⁶「もし、だれかがわたしのもとに来るとしても、父、母、妻、子供、兄弟、姉妹を、更に自分の命であろうとも、これを憎まないなら、わたしの弟子ではありえない。²⁷ 自分の十字架を背負ってついて来る者でなければ、だれであれ、わたしの弟子ではありえない。²⁸ あなたがたのうち、塔を建てようとするとき、造り上げるのに十分な費用があるかどうか、まず腰をすえて計算しない者がいるだろうか。²⁹ そうしないと、土台を築いただけで完成できず、見ていた人々は皆あざけて、³⁰『あの人は建て始めたが、完成することはできなかった』と言うだろう。³¹ また、どんな王でも、ほかの王と戦いに行こうとするときは、二万の兵を率いて進軍して来る敵を、自分の一万の兵で迎え撃つことができるかどうか、まず腰をすえて考えてみないだろうか。³² もしできないと分かれば、敵がまだ遠方にいる間に使節を送って、和を求めよう。³³ だから、同じように、自分の持ち物を一切捨てないならば、あなたがたのだれ一人としてわたしの弟子ではありえない。」
³⁴「確かに塩は良いものだ。だが、塩も塩気がなくなれば、その塩は何によって味が付けられようか。³⁵ 畑にも肥料にも、役立たず、外に投げ捨てられるだけだ。聞く耳のある者は聞きなさい。」

1 誤解されやすいテキスト

聖書の言葉は、そこだけ切り出しても正しく理解する事は難しく却って誤解されることが多いかもしれません。先ほどお読みしたルカ福音書14:25～35のテキストもそうです。ここだけ聞くと「イエス・キリストは狂信的な信徒を求めているのか？」と誤解する方がおられるかもしれません。しかし、私達がまず弁えておかねばならないのは、この言葉を語ったのが、イエス・キリストであるという事です。ルカによる福音書では、イエスさまがナインという町の未亡人が一人息子を亡くした葬儀の列に行き会わせた時の事が描かれています。主は、母親の深い嘆き悲しみをご自身のものとされ、息子を生き返らせて母の腕に返されました。主は人間の痛み苦しみ悲しみを実際に経験されよくよくご存じであり、決して人が人を大切に思う気持ちを蔑ろにされる方ではありません。ましてや、主イエスが命を軽んじる事などありえません。ここで主イエスは、人が人を大切に思いあうその愛を真実に徹底する為にはどうすればよいのかを語ってくださっています。今日の聖書テキストを通じて主イエスが私達に心を込めて語っておられる事を共に聴いて行きたいと思います。

2 塔を建てる話し

今日の聖書テキストには二つの譬えが出て来ますが、これらは、「賢く生きなさい」という主の教えだ…と言った方がおられます。本当にそうだと思います。ひとつ目の譬えは、塔を建てる人の話です。「誰かが塔のような大きな建物を建てようと思った時、事前に十分な資金があるかの計算もせず用意せずに、そのまま建て始めるならば、当然途中で資金切れになり、土台だけが雨ざらしとなり、見物人の嘲笑を買うだけ。そんな愚かなことをする人がいるだろうか？」と主は言われています。主がここで仰っているのは、「まず腰をすえて計算する」という賢さです。建て始めてから、あれやこれやに気づいてから慌てて計算するんじゃない、落ち着いてよく考え、何度も計算してから建て始める。事業の全体を見通す視野の広さと同時に細部をも漏らさない慎重さをもって計算してから始めれば、土台しか据えられないような中途半端に終わる事はないだろう。そんな中途半端で終わらせない賢さを主は語っておられます。

3 戦いに行く王の譬え

もう一つの戦いに行く王様の譬えも、主イエスが賢さを求めて語られたもの。「また、どんな王でも、ほかの王と戦いに行こうとするときは、二万の兵を率いて進軍して来る敵を、自分の一万の兵で迎え撃つことができるかどうか、まず腰をすえて考えてみないだろうか。」やはり腰を据えて落ち着いて計算するのです。その結果、「もしできないと分かれば、敵がまだ遠方にいる間に使節を送って、和を求めるだろう。」もし勝てないと分かったなら、和平を申し込みます。太平洋戦争時の日本軍のようになんの見通しもなく戦い始め、国内だけでなく国外でも考えられないほどの尊い命を犠牲を内外に出す、愚かだというだけでは到底すまされない事です。この譬えで、主がはっきり言われる事は、「今一万しかいない、兵力が足りなければ蓄えた上で争い、必ず勝とう」というものではありません。「敗北が明らかならば、それをさっさと認め、こちらから講和を申し出て和解する事こそ本当に賢い事である」と言われています。兵力が少ない方から申し出る講和ですから、条件はよくないでしょう。恥ずかしいこと、メンツが立たないこと、自分の持っている物を失う事です。しかし、そこで目先の面目や自分達の利益を守ろうと拘って命を失うような愚か者になってはだめだ、負ける時には負ける事を知り、改めてやり直す賢さを主イエスは勧めておられます。

どちらの譬えも、長期的で大きな目標を達成したり、自分達にとって何が最も大切かを見極めこれを守るためには、何を得て何を棄てるべきか、じっくりと考える知恵が大切であると語っておられるようです。この知恵に生きる為の

「家族や自分の命さえ憎まなければ、私の弟子ではあり得ない」という言葉のようです。

4 譬えの関連

それにしても「家族や自分の命までも憎まなければ私の弟子ではありえない」という言葉は衝撃的です。この「憎む」と訳されている言葉は、当時の中近東独特の言い回しで、「憎悪する」という直接的な意味ではなく、「より少なく愛する」というニュアンスの言葉だそうです。だからでしょうか、一つ前の口語訳では、「憎む」ではなくて「捨てる」と訳されています。「自分の家族や自分の命、そして自分の財産を捨てない者は、私の弟子ではあり得ない」とイエス様は仰っています。

これは世間一般で言う、「賢い」生き方とはずいぶんと違います。私たちがこの世で賢く生きるという事は、自分が持っているものを大切にしてそれを活用するという事でしょう。自分が持っているものとは目に見える財産もそうでしょうけれども、人間関係もまたこの世の財産です。この世で業績を上げる人々の殆どは、人間関係において賢い人。様々な人とのつながりを大切にしてこそ、上手に賢く生きられます。この世において神から与えられている人間関係と財産、それを賢く用いて生きていくことに私たちは心を配りますし、じつくりと腰を据えて計算すべきだと思っているものです。

その私達にとって、財産も人間関係も捨てて主イエスの弟子になるという事は、無謀な事、とてつもなく愚かな生き方でないか？と思わざるを得ません。主イエスは、この世の財産や人間関係を棄ててご自身の弟子となる生き方のどこに「賢さ」があると仰っているのでしょうか。

5 ゴルヴィツァー牧師

生きた歴史の中で語られた証言に聴いて行きたいと思います。ベルリンのダーレム教会のヘルムート・ゴルヴィツァー牧師が1940年にルカ福音書 14:25～35 を取り次いだ説教です。この方はナチが台頭した最初の頃から、抵抗して戦いぬいた牧師で、戦後は神学者としても活躍されました。第二次世界大戦中は、ベルリンのダーレム教会という教会の牧師でした。このダーレム教会は、本来は、マルティン・ニーメラーが主任牧師でした。このニーメラー牧師は、ヒトラーに逆らい非合法に逮捕され強制収容所に入れられました。1937年のことです。そのニーメラー牧師の留守中、ダーレム教会の説教者として働いたのが若きゴルヴィツァー牧師でした。彼もまたやがて招集され、東部戦線に送られるのですが、それまでの間、教会員と共に戦ってきました。そのゴルヴィツァー牧師が、今日の聖書テキストを説教したのは、1940年、既にニ

ーメラー牧師は獄中にありました。その頃、ダーレム教会ではゴルヴィツァー牧師によって、小さい礼拝堂に水曜日、土曜日の夜に集まり、〈とりなしの祈り〉の集会を続けていたそうです。1月13日、獄中にあるニーメラー牧師の誕生日の前日にも会衆が集まりました。そこで若きゴルヴィツァー牧師が、この主の言葉を読み、説教し、祈りへと導きました。この説教は、語られるままに記録され、戦後まとめられたゴルヴィツァー牧師の説教集の中に収録され、日本語にも訳されています。現代説教史の記念碑のような説教と言われているそうです。

考えてみれば、第二次世界大戦中のドイツでヒトラーに叛くなどという事は、計算ずくで生きている人には考えられない、愚かなことだったでしょう。ゴルヴィツァー牧師が獄中のニーメラー主任牧師を覚えて、この聖書テキストを説教をした1940年は、フランスのパリがドイツ軍によって陥落した年、ヒトラーの勢いはますます増し、ナチス・ドイツは向かう所敵なし、その前途は洋々たるものと思われていました。日独伊三国同盟が結ばれ、同盟国ドイツの躍進に地球の裏側に住む太平洋戦争前夜の日本人までもが熱狂していました。十分に腰を据えて計算しようとする人間でも、精々ここでは黙っていよう…という決心をするのがやっとなような時期です。

そういう中であって、自分達の教会の主任牧師であるニーメラーは愚かにもナチスに抵抗して強制収容所に送られている、その教会の教会員ですから自分達にも危険が及ぶのではないか、という不安はあったでしょう、ダーレム教会の中からも脱落者が出ていたそうです。しかし、大半の教会員たちは、そのような危機にあっても、若いゴルヴィツァー牧師のおとに結集しナチに抵抗し続けました。その戦いのさなか、この主の言葉を深い深い思いで聞いているのです。「父、母、妻、子、兄弟、姉妹、更に自分の命まで捨てて主の弟子となる道」を自分達の牧師自身がたどった、そして今獄中にある、自分達もその主任牧師と同じ所に立たされている。彼らにとっては、主のこの言葉を深く聴くほか道はありませんでした。

6 確実に奪われたように、確実に与えられる

その説教の中で、ゴルヴィツァー牧師はこう語ります。「私たちが今、その人のことを想って集まっている、ニーメラー牧師もまた、私たちと同じ罪人、神の前にあっては死せる者だった。しかし、死せる者であったからこそ、神によって命へと召し出された。キリストの傍らにあって、キリストに仕えるために、命へと召し出された。しかも、そのように神から与えられる命に生きることには、命を渡すことが分かちがたく結びついている。」

ニーメラー牧師には、それは他のキリスト者に起こることと全く同じこと、実際に、彼は父、母、妻、子、兄弟、姉妹、そして自分の命まで差し出している。

このようにゴルヴィツァー牧師は、主任牧師に起こった迫害を教会としてキリスト者として当然のことと受け止め、自分達の困窮した状況を、いたずらに嘆く事はしません。困窮の中にあるのは認めます。しかし、同時に言うのです。「ここで確実に奪われるように、また確実に与えられるであります。」厳しい現実を目を背けるような愚かな事はしない、大切な家族も命をも主は求められる程に厳しい人の罪との戦いがある、自分との戦いがある、それは腰を落ち着けて考えればわかること。「しかし、奪われたものは、確実にまた与えられる」。だから「勇気を出して、私のあとに従いなさい」と主イエスは招いてくださっているのだと言います。私たちの主イエスが、ここで私たちに語ってくださっているのは、罪との厳しい戦いの現実を突破するために『命を必ず与えて下さる神への信頼によってのみ生きることができるよう』という招きの言葉なのだとゴルヴィツァー牧師は言うのです。

絶大な権力を持つ政府に反抗し、すべてを奪われて今獄中にあるニーメラー牧師、彼の事を教会として迷惑な存在だと言おうと思えば言えるのです。しかし、そのような誘惑を受ける所で、私たち一人一人が今日の主の言葉を聞きます。「今、真に賢くに生きるという事は、どういう事なのか？主の他にあれも信じ、これも信じて頼りにするという事なのか？父や母や、家族たち、人間との絆を第一とし、自分の持っている物をあてにして生きる事が果たして賢い事なのか？」そのように問いかける主イエスの声を聞きます。

7 感謝

このゴルヴィツァー牧師の説教を翻訳した方がこう言っています。「この説教で感銘を受けるのは、感謝について語られているという事だ。」確かに説教を読んでいて「感謝すべきことに」という言葉が連続して語られている事に気づきます。たとえば、「どんなに酷い荒野を歩いている時にも、私たちは一人ではない、主が先立ってください」と語った後、ゴルヴィツァー牧師はこう続けます。「まことに感謝すべきことに、私たちは後から従えばいいのです。先立って歩むのではありません」。或いは、私たちは十字架を背負わされているが、「感謝すべき事に負わなければならないのは、ただ自分の十字架だけです。まことに感謝すべきことでありますが、主の弟子の誰もが、負わなければならないのは、ただ自分の十字架だけです。イエス・キリストの十字架ではないのです。まことに感謝すべきことですが、すべての罪が償われるあの十字架、神に捨てられる窮みの極地に、はるかな地獄に至る道を歩みぬくあの十字架、全世界が苦しみにによって救い出されたあの十字架、それを弟子達は負う必要はないのです。私たちの誰もが負うべきは、小さな自分の十字架。だが、それにしても、自分を罪人と認めて、自分の十字架を背負う事も本当に厳しい。

ただ、主イエスを信頼するという事実根差してのみ担い得るものであるのです。」

「感謝すべき事に」と言葉を連ねた後、彼は言います。「今、私たちが『神に感謝』という時、それはまさしくそうは思わない、神に感謝などできない自分自身に逆らってそれを口にする」。その通りだと思います。神に信頼せず、従って自分の小さな十字架を負おうとせず、神からいただいた様々な賜物を奪われないように握りしめ守ろうとする私達。しかし、そこで腰を据えて考える。「家族や財産によって自分は生きて来た。だが、果たしてその命は本当の命か？神を完全に信頼せずに、神を半ば信じると共に、財産もあてにする。それは愚かな事ではないか。」「今私達が取り囲まれている人間の罪の悲惨な現実を私達は打ち破れるか？打ち破ってくださったのは、ただお一人、イエス・キリストお一人ではないのか」「真の賢さとは、このイエス・キリストに集中することではないか？この方だけが主であって、他にいかなる主もない、主イエスだけを信じる切る事ではないのか。」そのように腰を落ち着けてこの福音書の言葉を考える時に、私達には、まことの賢い生き方が見えて来る、主の弟子となる道が見えて来るのです。それは、自分を主人として生きようとする生き方からの決別です。心の深い所で、自分自身を信じ切れていない、にも拘わらず自分自身しか信じない、そんな中途半端な生き方とは決別し、私の弟子として生きなさい、と主は求めておられます。このように語る牧師には、自分達が置かれている厳しい状況と共に、自分達と共にある主イエス、必ず勝利してくださる主イエスの姿がはっきりと見えていました。

8 捨てるという事は返すという事

だからこそ、主がここで「父や母、兄弟姉妹、自分の命までも私と共に生きる為に捨てなさい」と語られている「捨てる」という事は、「主に返す」と表現してもよいのだと思います。考えてみれば、家族や自分の命、どれ一つとっても自分の力で得たものではありません。神から、主から与えられたもの。それを主に返すのです。

例えば、親が「ヒットラーに抗うような愚かな真似はやせ」と言った時、これに従う事がまことの賢さでしょうか。私たちの自然な感情に従えば、愛する家族と対立などしたくはありません。しかし、そのようにして結局は誤った道に家族全体で進んで大きな罪を犯してしまう事は歴史に繰り返された事です。しかし、いったんすべてを捨ててイエス・キリストの弟子となれば、イエス・キリストの弟子として、家族との関係を新たに結びなおす事ができます。イエス・キリストの弟子として新しい関係を結びなおす所でこそ初めて、私達は両親にとって本当の子どもであり続ける事ができる、子どもにとっても本当の親であり続け、夫にとっては本当の妻であり続け、妻にとっては本当の夫であり続けることができる

のです。相手をコントロールしようとするのではなく、神に造られ生かされ救われた一人の者どうしの関係に生きることができるのです。

9 真実の塩に

キリストの弟子として生きる賢さがもたらす恵みは、私たちの身内だけ為ではありません。私達一人一人が主イエスの弟子と生きる事は、私たちの社会にかけがえのない命を与えるのです。それが、34節、35節で主が言われる、「塩」の譬えです。塩がなくては、私たち人間も動物も生きてはいけません。つまり、主イエスの弟子の存在は、すべての人間の命に欠かせない塩のような存在だと言っているのです。先ほど紹介しましたゴルヴィツァー牧師の説教に育まれたベルリンのダーレム教会がよい例になります。この教会は、厳しい戦いを戦い抜きました。ナチスの本部がありゲシュタポが隅々まで監視していたベルリンにあって、教会員達は、仲間のユダヤ人の教会員達を自宅に匿い通したそうです。また、今、現在アメリカの黒人差別を震源地として全世界へと広がっている人種差別抗議運動の発端を開いた1960年代の公民権運動を率いていたのはキング牧師です。彼もまた数々の脅迫を受け、家族の命を奪うと脅迫され続け、自宅に爆弾が投げ入れられたこともありました。しかし、キング牧師達は主の弟子として非暴力不服従の道を歩み続けました。この運動はキング牧師が暗殺された後も続き、人類にまことの賢さをもたらし続け、世界中の様々な人種の方々が、抗議運動に加わっています。また、昨年度、中国政府におもねる香港当局への抗議運動は世界的な話題となりましたが、そのテーマソングは、「Sing Hallelujah To The Lord」～主に向かってハレルヤと歌おうという讃美歌です。非暴力不服従のデモ行進の中心にキリスト者、キリストの弟子がいたのです。

彼らは、自分達の力や富を求めて争い合い嫉み合い憎み合う人間社会に、真の賢さによって、キリストの命を吹き込む地の塩としての役割を果たしました。人間の近視眼的な見方では、到底勝ち目のない戦いです。しかし、そこには、主イエスにのみ従う弟子達の賢さがあります。そして自分を捨てこの賢さに生きる一人一人が、人間の罪の歴史を命と平安の方向に転じ燦然と輝く光を放つのだと思います。彼らは特別な人々ではありません。私達と同じ主に招かれた人々です。この一週間も主イエスの招きに応え、横浜ナザレン教会の皆さんと共に主の弟子として歩んで行きたいと心から願います。